所によっても知られる。すなわち多聞第一と称される常隨眤近の弟子阿難が『大経』の会座において初めて釈尊に如来の相を覩見し、そこに出世本懐の経が開説されていくのであるが、そこで説かれる如来を覩見することは、客観的視点、また様々な状況・能力に依止することによってではない、真に主体的な値遇こそが教を開示することを、発起序の引用は示している。そのような値遇とは、親鸞にとっては本願の名号との値遇なのであって、この値遇こそが『大経』の教意を具体的・現実的に余すことなく伝え、仏道を成就してゆくことを、〈本願為宗・名号為体〉として表明したものと考えられる。

清沢満之の信仰表現について
――「自力」の語をてがかりに――

田村晃徳

清沢満之が「他力」の信に生きたことは明瞭である。しかし、清沢には「自力」との表現を用いた印象的な記述が幾つか見受けられる。ではその意図は何にあったのか、彼の信念の表現において「自力」との言葉はどのような位置を占めているのであろうか。例えば清沢には次のような記述が残されている。

之を我が一身の行為に就きて云はゞ、彼の人事を尽して天命に安んずるの事に過ぎずと雖も、我は寧ろ之を、天命に安じて人事を尽くす、と云はまく欲す。

（「天命に安んじて人事を尽くす」）

彼に在るものに対しては、唯他力を信ずべきのみ。

我に在るものに対しては、専ら自力を用うべきなり。而も此の自力も亦た他力の賦与に出づるものなり

（「臘扇記」十月二十一日）

自力の修善を勤むべし（之を勤めざるは人間にあらざるなり。）然れども、之を勤めんとするに能はざるなり。如かず自力を捨てゝ他力に帰し、其の信仰の結果として、自から避悪就善のなし得らるゝを期せんには

（「臘扇記」十月二十六日）

清沢の生きた時代を想起すれば、右のように「自力」という表現を使用した理由も推測されるであろう。清沢の時代、つまり明治時代は日本の近代化が急速に進んだ時期であった。近代化に伴い、自ずと価値観、人間観も変わってくる。近代の中心的人間観はいくつかの方面から指摘できようが、「自分を積極的に活かしていく立場」（西谷啓治）と大きくは説明できる。清沢の先のような「自力」の強調は時代を配慮して用いているのも一つの理由であろう。

しかし、上記のような清沢の姿勢は決して時代への配慮ではあっても、迎合ではなかったことは注意されねばならない。何故ならば、清沢は当時の人々が「優勝劣敗、生存競争の観念」によって、世界を「一種の戦場」と見なしていることに対して、「余はこれを然りとする能はざるものなり」と述べていた（「調和論」）。この点からも、清沢が同時代の風潮に批判的であったことは明瞭である。

清沢はそのような「生存競争、優勝劣敗」のような観念の原因として「主我主義」をあげていた（「無我主義は公共主義なり」）。ここで言われる「主我主義」とは簡潔には我、つまり自分を前面

に押し出し、自身の便利、利益の追求を第一に置く主義であると説明できる。人が皆、自身の為の利益追求に邁進するからこそ、競争主義も発生するのである。だが、清沢が「我等人類は相依相待のものなり」（「相依相対」）と述べていたように、人間は本来「相依相対」、つまり相対的であり、有限な存在なのである。この言葉の思想的背景に「万物一体」があることは明かであるが、それは同時に当時の人々が、自身の有限の姿を迷失し、あたかも「各個独立」して生存しているかのように思い込んでいることへの批判でもある。人間に求められるのは、自身の真実の姿を知ること、つまり「有限の自覚」なのであり、「有限者」であることを知るとは、自身が不完全であることを知ることに他ならない。不完全であるということは、自身には完全といえる能力は備わっていないということである。

では、人間には何事も行う能力はないのであろうか。換言すれば、人間が自身を「有限者」であると自覚することは、人間が何も行為できない事を意味するのであろうか。

その点については、次の文章が示唆を与えてくれる。

活動は常に不動と伴わねばならぬ。不動の根基に拠らずしては、活動は決してできるものでない。不動なる地盤の上にあらずば、吾人は歩行や運動をすることを得ない。吾人の精神の活動も、これと同じことである。不動の地盤によらずしては、本当の活動は決してできるものではない。（「不動の心」）

「活動」、つまり行為を行うためにはその根拠とも言うべき、「不動の根基」「不動の地盤」が求められる。それは自身を安立させる根拠とは何か、との問いに他ならないであろう。では、それらは具体的には何を示すのか。そのことを考察する際には、清沢の絶筆「我信念」の次のような表現が参考となろう。

この私をして虚心平気に、この世界に生死する事を得しむる能力の根本本体が、すなわち私の信ずる如来である。

（「我信念」）

この文章から分かるように、人間が、つまり「有限者」がその能力を発揮する、「我信念」の印象的な記述を用いるのであれば「虚心平気に、この世界に生死」することが出来るためには、さらなる「能力」を必要とするのであり、それが阿弥陀如来による救済に他ならないのである。語を換えて言うのであれば、信念を獲得することによってこそ人間は自分の能力を真に用いることが出来るのである。それは清沢が「我信念」の他の箇所で告白しているように、自身の自力が「無効」であることを知ることを離れてはあり得ない。「自力の破れ」とでも表現できうるそのような過程を経ることにより、換言すれば「他力」の信念を得てこそ、真に「自分を積極的に活かす立場」は開かれるのである。

以上の点から清沢が「自力」の表現を使用する事の意味を考えてみたい。

まず第一には、今まで見てきたように、そこで言われる自力は単純な自力ではなく、いわば「破れ」を通過した「自力」であったという点であろう。だから「自力の修善を勤むべし（之を勤めざるは人間にあらざるなり。）」との言葉はそれ自体は常識的通念として通じるものである。しかし、有限な人間の力に基づく以上「之を勤めんとするに能はざるなり」との結果に陥るのである。その故に「自力の修善」を行うには、「自力を捨て、他力に帰」すことが必須条件なのである。「この自力も亦他力の賦与に出づるものなり」との言葉からも分かるように、清沢が「自力」の語

を肯定的に用いる際は、根底に他力を携えた「自力」を指していることが分かる。

もう一点重要なのは、清沢がそのような形で「自力」について触れていた、という事実そのものであろう。ここには冒頭にも述べたように、時代、社会の状況を鑑みつつ、宗教の真理性を叙述する清沢の柔軟性とでも言える面が見える。近代化が推進され、人間観や価値観が変貌していく中、「自力」を始めとした、人間の「活動」全般を宗教的見地から否定しても、世間から顧みられない可能性は十分にある。しかし、「自力」が本来「無効」であるという本質もまた動かせない事実である。そこで、宗教表現に時世的要素を内包させつつも、仏教、ことに「他力門」の信念の真髄を伝える方法の一つが「自力」の表記であったのではなかろうか。第三点としては、清沢が同時代に対しての認識、つまり「競争淘汰」がその中心となっている社会に対して、批判的な姿勢をとっていたことを想起するのであれば、これらの自力を用いつつの信仰表現には、時代に対しての警告的側面をも有していたのではないだろうか。語を加えれば、人間が自分の有限性に対して無知であるからこそ、今のような人間観、社会観となってしまうのだ、というメッセージもそこに含まれていたと思われるのである。

親鸞における自然の思想
――「自」の読みを通して――

山田恵文

親鸞は、その九十年の生涯の中で晩年といえる七十八歳から八十六歳の間に精力的に著述した仮名文類に、「自然」の語を集中して表現している。また、親鸞八十六歳の奥書のある顕智書写の「獲得名号自然法爾御書」といわれる法語は、内容が若干異なるが『末燈鈔』所収のものと、文明本『正像末和讃』末尾に載せられているものとを含めて、これまで三種伝わっている。そこには親鸞晩年の思想が端的に表現されているとして、従来内外問わず多くの論者に注目されてきた。その理解には「自然」という語が持つ性格の故か、論者の立場によって大きな差異があるように感じられるが、基本的には「自然」とは「親鸞晩年に到達した思想を表現したものである」と、前提的に考察しているところがほぼ共通している。

確かに、親鸞の根本主著である『教行信証』には、「自然」に対する親鸞自身の解説が一カ所もないのであるから、当然持つべき見解であるといえよう。しかし、用語としては仮名文類に集中して見えるが、そのことをもって直ちに「晩年に到達した思想」を表現しているとは言い難い。親鸞の語る「自然」を正確に探究してみれば、それは『教行信証』に引かれた経論釈を再度解説していく中で表現された言葉であり、特に『大無量寿経』の「自然」を背景とした術語であることが分かる。ならば、それは決して晩年に限って考察すべき課題ではなく、むしろ親鸞の一貫した思想内容が託された言葉であるとの視点を持って、究明すべき用語であろう。

このような視点を持つとき、特に注目出来るのが、『教行信証』中にある全ての「自」について、親鸞自身厳密に「みずから」と「おのずから」に訓じ分けていることである。当然「おのずから」と読むときには、親鸞の自然の思想がそこに表現されている